

おかげさまで500号



小学生のとき、毎日、玉子取りの仕事をごなしてくれた長男が、いまは大学生・・・思わず遠い目。

上記のとおり、とにもかくにも今週で「たまご新聞」は500号を数えます。

前々号にちょっと書きましたが、23年前、東京でのサラリーマン生活に終止符を打ち、父ちゃんの故郷にUターンして「百姓」をめざしました。北海道出身の母ちゃんにとってはJターンです。

*

いまは家の解体という、ユンボなど重機でバリバリと壊してしまいます。が、かつては板1枚、柱1本をていねいにばらしていました。そうした現場に一升酒を抱えていき、もらってきた廃材を利用して鶏舎を建てたりしました。

ヒヨコを入れて育てて、最初の玉子が産まれたのは、長女がヨチヨチ歩きを始めたころでした。もちろん、売り先に当てがあったわけではありません。

さっそく右の写真のように、手作りのチラシと見本の玉子を配ってまわったのです。

その最初の頃からのお客様が何軒も続いています。ありがたく嬉しいことです。

*

20年以上の歳月は、小さかった子がそれぞれに成長し、家を離れ、自立するのに十分な時間です。家族が減り、食材も量も変わります。配達個数が減ったり、配達を辞めたりのケースも出てきています。

この年明けに、ある長年のお客様の同じ職場の方が、こんな話を伝

えてくれました。

「R子さんたらね、康子さんには来てほしいけど、玉子はだぶついて、

でも、なかなか言えないんだって」

あらあらR子さん、ありがとうございます。おかげさまで、自然卵を待ってくださっているお客さんは、他にもいらっしゃると思います。あ、ご迷惑でなければ、お便りだけは配らせていただきます。仕事

のお手すきのときには、たまにはお話も聞かせてくださいね。

*

なんだか、勝手にしみじみしやいました。これからもよろしく願いいたします。

